

楽しみがいっぱい

森 洋

今年の夏はとても暑かったが、私は良い避暑の場を見つけた。暑さがしのげるうえにお金も要らない。そして、新しい人との出会いがあり、調べ物をしてポケ防止にも役立つ。そのうえ、人さまに喜んでもらえるのならば、これはもう二石二鳥どころの話ではない。

府立狭山池博物館は二〇〇一年に開館したが、間もなくボランティア・ガイドの募集があり、私はこれに応じて研修を受けた。しかし、当時は仕事があり、思い出したようにガイドをするばかりで、展示物についての知識も、来館者の質問に答えるにはずいぶんとあやふやであった。

昨春、完全退職となり自由時間が増えた。博物館が開く講座を何度か受講し、本も読んで、展示物の理解も少しばかり深まった。

今年七月、久々に博物館に行くと、河内長野市や千早赤阪村から手弁当で来て、

月に何回もガイドをしている人たちを知った。「地元も頑張らねば」と、それからはできるだけ博物館に足を運ぶようにした。

開館当初とは異なり、ほとんどの展示物が重要文化財に指定され、狭山池は「国の史跡」に格上げされた。新聞やマスコミを通じて知って、来館する人が増えている。

なかでも外国人がすこぶる多い。彼らの姿を見ない日はほとんどない。台湾・韓国・中国はもちろん、東南アジア・欧米からも来ている。大部分は建築家や建築を学ぶ学生たちで、館を設計した安藤忠雄氏や博物館の建物そのものに魅かれて来るのだ。また、当館は閑空と大阪の中間に位置し、鉄道のアクセスも良く、さらには入館料が無料とあり、足を運びやすいのだそう。

私は、かつて中学・高校で英語を教えていた。せっかく来てくれる外国人にも案内ができればと思いい、博物館が用意した英語の解説を読んだり、自分なりに案内文を作ったりして、そらで言えるように練習した。

初めて英語で案内したのは女学生だった。「どちらから？」と日本語で話しかけるが返事がない。英語にすると、「台

湾」と、笑顔が返ってきた。「大きな展示物でしょ」と言いつつ説明に入る。言葉や文章が出てこず詰まる場面もあったが、説明で内容が分かったと喜んでくれた。私は彼女と会話を楽しめた。

以来、博物館に足を運ぶ回数を増やし、日本人であれ、外国人であれ、来館者に積極的にならざるに案内をしている。せっかく狭山池博物館に足を運んでくれた人たちだ。池のこと、展示物のことを少しでも知ってもらいたいし、世間話や会話で交流もしたい。相手の話を聞くのもガイドの醍醐味で、来館者から学ぶこと、気づくことがとても多い。

やがて冬が来る。今度は暖を取りに博物館に行こうと思う。展示物のこと、安藤忠雄氏や彼の建築物のことももっと知り、来館者と話し合えたらと思う。英語力も付けたい。狭山池博物館は、楽しみがいっぱいである。